

ブラームスとドイツレクイエム

ブラームスはドイツのハンブルク生まれの作曲家。ベートーヴェンの死の少し後に生まれ、活躍しました。音楽の歴史上、非常に重要な作曲家の一人で、その業績はバッハ、ベートーヴェンとともに「ドイツ3大B」と称されています。

内気で、自分の内面を他人に見せるのが苦手だったようですが、美しいメロディや暖かな響きを通じて内に秘めた感情が伝わる作品を、数多く残しています。

●ピアノで家計を支えながら才能を培った10代

貧しい家庭に生まれたブラームスは、市民楽団のコントラバス奏者だった父から手ほどきを受け、音楽を始めました。

やがてピアノを学び始めると、才能が開花。10歳で初舞台を踏みます。ブラームスは家計を支えるために酒場で演奏しながらピアノと作曲を学び続け、最初はピアニストとして高い評価を得るようになりました。

●シューマンとの出会いで

転機が訪れた20代

その後、ブラームスは作曲に専念するようになりました。そして20歳の時、作曲家・音楽評論家として有名だったシューマンと出会います。



シューマン

シューマンはブラームスの作品をとっても気に入り、評論でその才能を大絶賛！ ブラームスはシューマンに輝かしい未来を予言され、ドイツ音楽界で「ベートーヴェンの後継者」として大きな期待を寄せられる存在になりました。

●大切な人の死から生まれた「ドイツレクイエム」

しかし、出会いから3年後、自分を世に送り出してくれた恩人のシューマンが死去。ブラームスはこれをきっかけに、「ドイツレクイエム」の作曲に着手し、10年以上の歳月をかけて完成させました。その間にブラームスは母を亡くしており、それも作曲を促したようです。

「ドイツレクイエム」はブラームス最大の合唱曲であり、彼にとって初めての大規模なオーケストラ作品でした。初演は大成功。シューマンの未亡人クララも「亡き夫の予言通り、ブラームスの成功が実現した」と、大変喜んだそうです。この成功により、ブラームスは恩人シューマンがかけてくれた期待に、本当の意味で応えることができたのです。



ドイツレクイエム 楽曲紹介

「ドイツレクイエム (Ein deutsches Requiem)」はドイツの作曲家であるヨハネス・ブラームスによる合唱作品です。大編成のオーケストラと合唱に加え、ソプラノ、バリトン独唱を伴い、演奏時間は約70分と、とても規模の大きな作品になっています。

レクイエムはもともと、キリスト教のミサで演奏された、死者の魂の安息を祈る音楽です。歌詞も音楽も死者の魂が生前の行いによって裁かれる恐怖を強調し、魂が罰を受けることなく、救われて天国へと行けるように祈る内容になっています。しかしドイツレクイエムは生きる人々が死と向き合って感じる悲しみや、命の儂さや人生の報われなさへの苦悩に寄り添い、その心の安らぎを祈る内容になっています。そのためドイツレクイエムはしばしば、死者のための音楽である元来のレクイエムと対比して、「生者のためのレクイエム」と呼ばれます。

ドイツレクイエムの歌詞は、ブラームスが自らのメッセージを込めてドイツ語聖書から選び、再編したものです。またブラームスはドイツレクイエムについて、「《ドイツ》を取って《全人類の》としてもいい」「歌詞を選ぶにあたり、キリスト教の教義に深く関わる部分は意図して避けた」と述べています。歌詞の内容やこれらのエピソードからは、ブラームスが国や宗教の垣根を越えて、広く人類全体に温かな眼差しを注いでいたことが伝わってきます。

曲は全7曲からなります。前半3曲は人が死と向き合い、生きていく中で背負う悲しみや、命の儂さ・人生の報われな

さに対する苦悩を描きます。第4曲の神への賛美を転換点に、後半3曲は、人は死を通じて現世の苦悩や労苦から解放されて救われ、天の国に招かれて安らぎ、それまでの生き方も報われるのだと歌います。

●第1曲

人が生きる中で背負う悲しみに寄り添い、その悲しみはやがて慰められ、より大きな喜びへと繋がるのだと歌います。

●第2曲

人の命や栄華を、いつかは枯れる草、いつかは散る花にたとえ、人の世の無常と儚さを嘆きます。そして、それと対比し、永遠に変わることのないものとして神の言葉を挙げ、嘆いたり現世の栄華を追い求めたりするのではなく、神の恵みがもたらされるのを待つようにと歌います。

●第3曲

やがては死を迎え、あくせく働き蓄えた富も失われてしまう人生の虚しさを嘆き、第1曲、第2曲も踏まえ、悲しみや苦悩に満ちた人生を、何を慰めとして生きればいいのか?と問いかけます。そして、自らは神を慰めとし、絶対の信頼を置くことを宣言します。

●第4曲

第3曲での宣言を受け、神への信頼、神とともに生きる喜びを歌い、神を賛美します。

前半に描かれた悲しみや苦悩が、この曲を転換点として慰めや救いへと変わっていきます。

●第5曲

第3曲の宣言、第4曲の賛美に込めて、「悲しむあなた方を我が子のように慰めよう」と神の慈愛に満ちた言葉が返されます。

●第6曲

現世の限られた生ではなく、永遠の命と安息を得る地を探す人々に、死に打ち勝ち永遠の命をもたらす神の神秘を告げ、死は生の終わりではなく永遠の命への変化なのだと言えます。そして、それを成す神の力の偉大さを讃えます。

●第7曲

「神を信頼して死ぬ者は幸いである。なぜなら、死を通じて人は労苦から解放されて救われるから」と歌います。最後は第1曲と同じ旋律が使われ、第1曲で歌われた悲しみへの慰めが、ここで実現したことが示されます。

今回の演奏会のプログラム

今回の演奏会はシューマンの交響曲第2番ハ長調より、第3楽章「アダージョ・エスプレッシヴォ」で幕を開け、その後ブラームス「ドイツレクイエム」を演奏します。

シューマンは、ブラームスと出会う10年ほど前から、精神の不調に悩まされていました。交響曲第2番はシューマン自身が「まだ半病人のまま作曲した」と述べている通り、せつなく就いた教職を不調により辞し、住まいを変えて再起の道を探っていた時期に、作曲が開始されました。「第1楽章は自分の状況との闘争に満ち」「終楽章でようやく人心地がつき始めた」とのシューマンの言葉通り、第4楽章の光を感じるフィナーレに向かう、シューマン自身の精神の戦いと再起の道を感じさせる作品です。今回演奏する第3楽章はゆったりとしたテンポで、苦悩から逃れようと抗い、時にため息を吐露するような、愁いに満ちた旋律が展開されていきます。

この曲を作曲して数年後、シューマンはブラームスと出会い、ブラームスを次代を担う才能と認めて、世に送り出しました。そして、ブラームスは恩人シューマンの死をきっかけにドイツレクイエムを構想し、その作曲をもってシューマンの期待に応えました。

今回の演奏会では実際の二人の関係の通り、シューマンからブラームスへと音楽のバトンが渡されていきます。「アダージョ・エスプレッシヴォ」、「ドイツレクイエム」それぞれの曲の世界だけでなく、そういった演奏会のストーリーも思い浮かべながら楽しんでいただけますと幸いです。